

「愛情を持って親身な対応」のヒントになった、 パッチ・アダムスのある信条

医療法人社団 健育会 理事長 竹川 節男



健育会グループの総合パンフレットにある冒頭文には、わがグループに対する、私の想いが掲載されています。今年は、その内容を一部変更しました。今回の理事長トークでは、その変更について私から思うところを説明します。

我々、健育会グループは「光り輝く民間病院」というミッションを掲げ、グループの総合パンフレットの挨拶文でもその内容について記述しています。今後、日本の財政状況が益々厳しくなる中、公的病院の補助金は減少の一途を辿り、統廃合が進んで数が少なくなっていくことが予想されます。そうした状況では、我々民間病院こそが確実に経営・運営を行い、病院を存続させて日本の医療を支え、国民の健康を守る使命があります。これこそが「光り輝く民間病院」であると私は考えてきました。

この健育会のミッションは今も変わっていませんが、私たちが目指す“病院が提供する医療サービスの内容”は、より明確になってきたと実感しています。今回、総合パンフレットの冒頭文にはそうした変化を反映するべく、新たに内容を一部追加して以下のように変更しました。



『光り輝く民間病院』の実現、それが私たちの目標です。医療崩壊に対する不安が高まるからこそ、民間病院は光り輝く存在とならなければなりません。

今後病院の経営環境がどれほど厳しくなるうとも国民の皆さんが安心できる医療を提供するためにありとあらゆる知恵を結集して病院を健全に運営することが、私たちの使命です。

私たち健育会グループは、サービス業を超える医療、福祉の実現を目指しています。

医療や介護を担う者は利用者（クライアント）から信頼され、すべての方々の尊厳を平等に扱い、誰に対しても愛情を持って親身に対応する「クライアントの心が豊かになる病院、施設」それが私たちの目標『光り輝く民間病院』です。IT革命など社会情勢の変化により、物から気遣いや思いやりがより価値を持つ時代のなか、健育会グループは全職員が愛情を持って親身な対応をすることが病気の治癒力向上につながると確信しています。

「仕事のやりがい」、「一人ひとりの人生の夢」、「医療・福祉に携わる者の使命感」、この3つのキーワードは健育会グループで働くすべての人々に対して私が掲げる運営理念です。

病気を患ってしまった人、介護が必要となった人など、人生を築いていく上で医療や介護を求める人々は日ごとに増大しています。健育会グループは専門分野のそれぞれ異なるプロが互いに協力しあい、ワンチームでより多くの方々から信頼される素晴らしい医療・介護サービスの提供を実現するためにチャレンジしていきます。

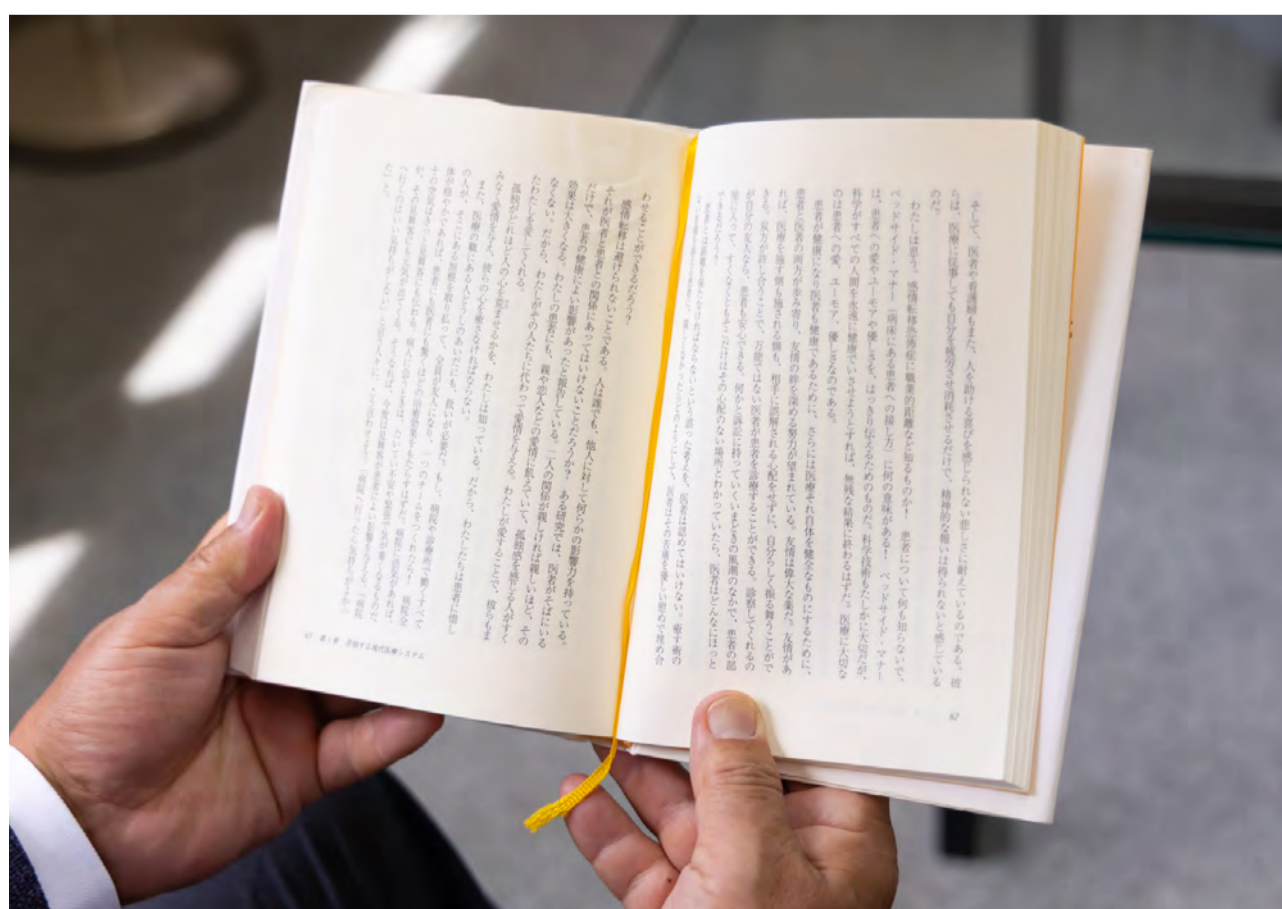


新たに追加したのは、今年の健育会のキャッチフレーズでもある「愛情を持って親身な対応」という言葉です。これは何年も前に出版された「パッチ・アダムスと夢の病院」という本を読み、共感を覚えたことがヒントになりました。

ただし先に伝えておきたいのは、この本の全てに同感したわけではないということです。むしろ内容のほとんどに違和感を覚えました。なぜなら、ドクターアダムスは精神科の医師だからです。精神科の治療は他の科と少し違い、心と心のつながりを大切にし、科学者として“冷めた目”で患者さんを診てはいけないとされていて、この本にもそうした内容が書かれています。

しかし内科や外科の医師は、誤解を恐れずにいうと、逆に「科学者として患者さんを一つの生物として客観的に診る」ことが必要だと私は思っています。昔から、医師は自分の肉親を診てはいけないと言われていますが、それは客観性を失ってしまうため。感情的になって診断を誤ったり、薬の量を間違えたりといったミスを犯す可能性があるからです。

実際に私自身もそうした経験があるので、やはり肉親は診てはいけないし、科学者として患者さんを冷静な目で診なくてはいけないと思っています。しかしこの本を読み、やはりそれだけではなく、私たち医療人は愛情を持って親身に接するという気持ちも併せ持つべきだ、ということに改めて認識しました。



特に共感したのが、本の63ページにある「もし、病院や診療所で働くすべての人が、そこにある垣根を取り払って、全員が友人になり、一つのチームをつくれたら！ 病院全体が穏やかであれば、患者にも医者にも驚くほどの治癒効果をもたらすはずだ」というドクターアダムスの思いです。

病院のスタッフが一つのチームになって、患者さんに愛情を持って親身に接すれば、患者さんの治癒効果を向上することにつながる、ということです。これはまさに、我々健育会が日頃から掲げている「ワンチーム」の考え方とリンクしています。

親身に対応することが患者さんに治癒効果をもたらすということは、すでにこれまでの経験で度々体感してきました。その一方で、医療もサービス業だから患者さんに気持ち良く過ごしてもらうために病院側も相手の立場に立つべき、という考え方には、医療の特殊性から少し違和感を感じていたのです。それがドクターアダムスの本を読んだことで、親身に対応するべき理由がはっきりと理論的につながったのです。

同じ医療行為をしても、私たちの接し方一つで患者さんの治り方は違ってきます。そうした研究発表はまだありませんが、患者さんが気持ち良く過ごせれば、様々なホルモンや自律神経のバランスが整えられて、病気に対する免疫力がアップし、快復につながると私は推測します。



またワンチームには、我々病院スタッフだけでなく患者さんのご家族の存在も必要不可欠です。実際、私が研修医1年目だった頃、障害の残った患者さんがご家族の熱心な看病の末に半年間のリハビリで目覚ましい快復を遂げた姿を見て驚いたことがあります。最近も、私の小学校の同級生の奥様が脳出血で倒れられたのですが、同級生の熱心な看病で奥様の意識状態が改善され、ミラクル賞ともいべき快復を目の当たりしました。

このように、私の中で新たに明確になった、愛情を持って親身な対応のできる病院こそが、まさに「光り輝く民間病院」であるという考えを伝えることが、巻頭の挨拶文を変えた趣旨であります。これからも、科学者としての冷静な目と、ご家族と病院がワンチームになって患者さんの快復をサポートしていくという両輪で、光り輝く民間病院を目指していきたいと思えます。

